［COMMUNION］
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocesan Office

コミュニオン

東京教区時報［夏号］

第５２号
（通巻１２８７号）
2019年7月21日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

東京教区合同聖餐式

６月９日の聖霊降臨日午後２時から香蘭女学校礼拝堂において、東京教区の合同聖餐式と合同堅信式（入信の式）が行われた。参加者は約６３０名、堅信を受けられた方は24名であった。

髙橋宏幸主教は説教の中で、「イエス様は最後の晩餐の時、『必ず帰って来る』『あなた方は憂いているが、その憂いは喜びに変わる』と語りました。そのメッセージは弟子たちとの信頼関係、特にイエスさまからの『受け止めてくれるに違いない』という信頼があり、語られた希望のメッセージです。」

「聖パウロは、手紙の中で、その希望を『死に打ち勝たれた』と書き、『神様との結びつきは、そう簡単には途切れない、神様は決して私たちを見放さない、神様の息吹は、今もあの頃と変わらず注がれ続けている』と、魂を込めて力説しています。」と語り、「神様というとてつもなく大きく、豊かで命の源である方に包まれ、その中にこそ自らを見いだしていく、それが聖霊という神様の息吹を戴いた時、裏切りさえした弟子たちに与えられた、それまでとは大きく違う新しい生き方の始まりでした。それこそが、聖霊降臨の出来事であり、キリスト教会の誕生であり、それは新たな命を授けられた私たちの誕生そのものとなったのです。」

「最後に聖ペテロ、聖パウロ、それに続く多くの聖人たちを深い悔い改めと復活に与らせ、殉教も厭わず神様に従わせた聖霊の働きが、私たちにも注がれることを深く祈り求めます」と結んだ。

礼拝後、堅信者の笑顔を見て、多くの人がこの喜びに連なることが教会の使命であることを改めて確認したひとときであった。

（文責　広報委員会）

正義と平和協議会　平和メッセージ

沖縄、そして済州の痛ましい傷に向き合って

司祭　池　星熙

沖縄は、現在もたくさんの痛みが残されている地域です。皆さんもご存じのように、太平洋戦争当時、沖縄は日本国内で唯一地上戦が行われた所だからです。また、当時の沖縄の人達をより深く苦しめたのは、実は日本帝国の首脳部が発したある命令でした。帝国政府は、本土防衛のための時間稼ぎに沖縄を選び、最後の一人まで戦うようにと布告しました。「天皇と祖国のために、喜んで戦わなければならない」と、天皇制イデオロギーを強要しました。しかも、万が一米軍の捕虜になれば、女性たちは陵辱され、男性は四肢を裂かれて殺されるという内容の通達を住民に絶えず復唱させました。

そのため、やっとの思いで洞窟に隠れた住民の多くが、自国軍の銃剣の前に、兄弟姉妹、親子、夫婦の間で殺しあう集団自決を強いられました。その結果、沖縄戦での住民の死者は12万人にも達したのです。

まさに沖縄は見捨てられた島となりました。日本に返還された後も、駐留基地という形で軍隊が残っています。現在日本にある米軍基地の約70％が沖縄にあり、在日米軍5万5千人のうち、約2万6千人が沖縄に駐留しています。

戦争中、沖縄を占領したアメリカ軍は日本本土への上陸の準備をしました。アメリカ軍の次の拠点が今の韓国の済州島になるだろうと予想した帝国政府は、済州島に総力を傾け約6万5千人もの兵力を動員し、集結しました。そして、彼らが駐屯する大規模な軍事施設を作るために、済州島の人々から人的・物的資源を奪いました。

済州島には、太平洋戦争以前から中国本土を占領するための司令部を置く計画があり、1935年にアルトゥル飛行場を済州道（チェジュド）の松岳山付近に作りました。戦争の末期には、自殺部隊として知られる神風特攻隊の訓練地として使用し、戦争終結後も飛行場を拡張して、地下バンカーと高射砲陣地を設置しました。戦略上の要衝であるアルトゥル飛行場の一帯には、全長1433メートルにわたる41本のトンネルがお互いに繋がるように作られており、最後の玉砕地域に選ばれたのでした。済州島全域でこのようなトンネルが70ヵ所あまり発見されていますが、連合軍が済州島に来る前に日本が敗れ、使用されることはありませんでした。

しかし、済州島の戦争がそれで完全に終わったわけではありません。1945年12月にモスクワで、戦勝国であるアメリカ、イギリス、ソ連などの外相らが集まり、その後の5年間、南はアメリカとイギリスが、北はソ連と中国が統治するという信託統治案を決議しました。朝鮮半島の人々は、南北に分けられた統治方法に憤り、南側単独での選挙を行い、これに反発しました。それに対して、駐留米軍と当時南側の政治を掌握していた李承晩政権はその解決策を済州島に見つけました。

米軍を後ろ盾とする李承晩政権と軍部に対してデモを始めた済州島住民を過度に弾圧し、政府に不満を持つ者への見せしめとしたのです。警察の発砲で6人が死亡した事件を皮切りに、「済州4・3事件」に達しました。自国軍隊と警察の銃剣の前で3万人に近い人たちが犠牲になりました。

沖縄と済州島は両国の政府から捨てられた島であり、利用された島でした。そして今も痛みが消えない理由は、両島がいまだ米軍基地としての役割を果たしているからではないでしょうか。

人間の体であれば体のどこかに受けた痛みは全身に伝わります。手であれ、足であれ、痛みを感じることもなく切り離してしまうことはできません。人間の体はそれぞれが綿密に構成され、繋がっています。最近の研究によれば、人間は数10億個の細胞の組み合わせとそれを管理する1万3千個の遺伝子で構成されているそうです。その一つ一つが痛みをもつ我々自身なのです。イエス・キリストの名で一つになった私たちは、各自が一つの遺伝子となり、感覚となり、細胞となって主キリストの中でそれぞれの役割を担いながら平和をこの世へと現わす努力をしなければなりません。

私たちは、国家と民族を越えて、イエス・キリストの名により一つとなった者たちです。キリスト者である私たちがまず一つになって、癒しと許しと共存のために世界を慰めていかなければならないのです。世の中に平和をもたらし、守りぬいていくことが、神様が私たちに与えられた使命だからです。

正義と平和協議会　平和メッセージ　こどもたちへ

「正義ってなんだろう？　平和ってなんだろう？」

主教 髙橋 宏幸

みなさんは、積み木遊びをしたことがあるでしょうか？　大きい積み木や重い積み木は下のほうに、小さい積み木や軽い積み木は上のほうにおくとわざと倒さないかぎりくずれません。けれども反対に、大きい積み木や重い積み木を上に、小さい積み木や軽い積み木を下に置いてしまうと、積み木はあっという間にくずれてしまいます。

むずかしい言葉ですけれども、「秩序」「調和」という言葉があります。倒れない積み木は、きちんとこの秩序や調和がたもたれています。この秩序という言葉には、「正しい順序や行動」「人やものごとが正しく結びついて、バランスがたもたれていること」という意味があり、そのようなときに「秩序がある」といいます。調和という言葉には、「全体がつりあっていること」「食いちがっていないこと」「まとまっていること」という意味があります。英語では、音楽の時間などで聞いたことがあると思いますが、「ハーモニー」という言葉になります。きれいなハーモニーは耳や心にひびきますし、感動します。おだやかな気持ちにもさせられます。

けれども、反対に、秩序やバランス、調和がたもたれていないと、いとも簡単にくずれたり、みだれたりしてしまいます。聖書の中にも、 イエスさまの教えの中にも、このことを伝えている話がいくつもでてきます。最初に神さまがこの世や人間をつくられたとき、秩序やつながり、バランス、調和がたもたれていました。そして、神さまが人間に命をさずけ、人間をつくられたとき、つぎのようにおっしゃいました。「人が一人でいるのは良くない。彼に合う助ける者をつくろう」と。少しむずかしいかもしれませんけれども、「私たちは一人きりで生きていかれますか？」「だれにもつながっていないとき、幸せと思えますか？」「だれかと一緒にいられるからこそ幸せを感じられるようになりませんか？」という意味がこめられています。

ところが、だんだんと人間が思いあがったり、自分勝手なことをしはじめたりしたとき、秩序やつながり、バランス、調和はくずれてしまいました。「バベルの塔」というお話の中にも同じようなことが書かれています。そして、このようなことは、私たち人間だけでなく、神さまをも悲しませることになってしまいました。

それから時間がたち、イエスさまがお生まれになったときにも同じようなことがありましたが、その中でイエスさまが心から大事になさったこと、伝えられたこと、守りなさいとおっしゃったことは、命を大切にすること、そして自分の命は他の人たちの命ともつながっているということでした。人間だけではなくて、自然もふくめて命のつながりをつくり、大切にしていくことはイエスさまの喜ばれることです。

命のつながりを壊したり、くずしたりすることか、反対に力をあわせて命のつながりをさらに大事に積み上げていくことか、神さまが、イエスさまが喜ばれるほうを大事にしあいたいと思います。

2019新しい聖地旅行　その1

新しい聖地旅行（サラーム・パレスチナ主催）は従来の巡礼のみでなく、パレスチナの現状理解とそこに生きる人々との出会いの旅でした。

十字架の道行きから想うパレスチナ問題

イエス様がローマ帝国の総督ピラトの官邸で行われた裁判で有罪となり、十字架を背負って歩いた道～ヴィア・ドロローサ～を歩き、感動に満ち溢れると同時に深く考えさせられました。

ガリラヤ湖畔　パンと魚の奇跡の教会のモザイク

第2次大戦後、旧約聖書に記されたパレスチナに、ユダヤ人国家の建国をというユダヤ民族の願いが実現し、1948年にイスラエルが建国されました。ところがイスラエルに与えられた地には、イスラム教徒やキリスト教徒が長い間生活していたのです。イスラエルは国連が定めた境界を超えてパレスチナ側に入植地を広げ、安全のためと称し、高さが8mにも及ぶ分離壁を建設し、パレスチナの人々の生活を分断しています。

今、深い苦しみを強いられているパレスチナ人とユダヤ人が共存できる世界が一日も早く実現することを切に願います。

（K・M）

難民キャンプと分離壁

初めて参加した聖地旅行。聖書に出てくる場所をこの目で見て感動！しかし、一方であまりよく理解していなかったパレスチナ問題にも直面。

イスラエル軍が侵略し、パレスチナの人々は自分たちの土地を奪われ、家を破壊され、命を奪われ、イスラエル側が作った高さ8メートルの分離壁の中に閉じ込められ、監視塔の中から監視され、外に出るには遠い検問所を通らなければならない。そんな中でも、訪れた難民キャンプで過ごしている方々は、明るく笑顔で過ごしているように感じたが、ゴーストタウンと化した場所もあった。

イエスは『互いに愛し合いなさい』『平和を実現する人々は、幸いである』とおっしゃっているのに…。一日も早く聖書の言葉が現実のものになるために私たちが出来ることは？しなくてはならないことは？いろいろと考えさせられ、実り多き旅行でした。

（I・R）

検問中に思ったこと

「パレスチナに旅してくる。イスラエルはおまけ」と周囲に宣言して私は出かけましたが、やはり検問所では緊張しました。バスの中に兵士が乗ってきて、私がパスポートを探している間に彼はバスを降り、あっけなく検問は終わっていました。他の検問所も然り。その緩さには理由がありました。既にイスラエルのパレスチナへの支配が定着しつつあるから彼等には余裕さえ感じられるとのこと。

「十字架の道行」を追体験しながら、イエス様の苦しみとパレスチナの人々のそれとが重なり、怒りと悔しさを禁じ得ませんでした。

でも、例えば「テント・オブ・ネーションズ」で必要なコンポスト作りが動き始めようとしていることを聞くと、私にもできる小さな一歩は何かと今、思い巡らしています。

（O・I）

タイベ村で

タイベ村は1300人全ての住人がキリスト教徒です。イスラエルの劣悪な政策に苦しみ、村人の90％は離散してしまいました。パレスチナ全体でクリスチャンの割合が1％にまで下がっている今、聖霊降臨以来の信仰を村人全員が守ってきたとは、何と稀有なことでしょう。

歓迎の会でお会いしたシルビア・マシスさんは、私達が持っていた地図を見て、何と呼ぶかと尋ねました。一部はイスラエルと呼ばれるがパレスチナだ、と答えると、それまで明るく快活に話していた彼女は途端に真剣な表情になり、英語とアラビア語で周囲に力強く語りかけました。「ここは私達がずっと住んできた土地、国。イスラエルのものではない。日本から来た彼女もそう言ってくれることを、誇りに思う」。再会の日まで祈り合おうと約束して別れました。聖地で与えられた出会いに感謝。

（Y・K）

秋号へ続く

タイベ村の信徒夫婦は新聞紙で折った兜に大喜び

「原発のない世界を求める国際協議会」に参加して…

～「あの時」は終わった過去ではない～

教区総務・危機対応デスク　松村　豊

5月28日から31日、日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」が仙台市で開催されました。

この協議会は、2018年の日本聖公会第64（定期）総会の決議を受け開かれたもので、各教区から主教・司祭・信徒の3名、そして海外5ケ国の聖公会、日本キリスト教協議会などから総勢68名が集まりました。東京教区からは髙橋宏幸教区主教と私が参加しました。

協議会では2つの講演、次いで3つの発題があり、グループシェアリングや全体討議を経て、世界に向け「原発廃止」を呼びかける声明について協議されました。

冒頭の基調講演では、ミュンヘン工科大学教授による「ドイツの脱原発転換プロセス」が語られました。この講演は一般に公開され、会場の仙台基督教会には約150人が集まりました。協議会メンバーだけでなく少しでも多くの人に問題を知って貰う機会として活かされました。事故を起こした当事国である日本の政策取り組みが、ドイツのそれと何故こんなにも違うのか、聴衆の茫然とした思いに会場は包まれました。

近郊の宿泊地に移動し翌日には、福島の母親ら200名以上との700回におよぶ面談の声と実状について、日本キリスト教団牧師の講演がありました。師は東北ヘルプ事務局長として2011年から継続して今も仙台や福島で被災者に寄り添っています。この瞬間にも原発事故による健康への不安、家族や地域の分断など様々な苦しみや悲しみのうちにある人々が居ることに胸が締め付けられました。次いで海外の聖公会から台湾の原発廃止や韓国の脱核運動の現状が報告され、そして日本聖公会から「いのち」を守るため原発のない世界を求めることについて発題がありました。

会期中、参加者は熱心に聴き入るだけではなく、2度のグループシェアや時間を延長しての全体討議で活発な意見を交わしました。また、津波被災地を巡るバスの中、食事や入浴の際、交流会や部屋で過ごす時にも真剣に語り合う様子が見られました。

原発・放射能の問題は、あまりにも膨大な事柄です。私たち日本聖公会は8年前の「あの時」以来、「いっしょに歩こうプロジェクト」はじめ管区をあげて一連の取り組みを続けています。しかし、私たちに出来るような如何なる取り組みも役に立たないのではないか、私たちはそのような無力感を感じたり、時の経過を理由にこの問題への関心を失いがちです。

今回のように原発・放射能問題を巡って、一堂に介して語り合える機会などそうあることではありません。この協議会は外部の識者や他教派牧師の知見や体験を聴き考えるものでした。日本聖公会が環太平洋の国々と連帯して徐々にではあっても具体的な行動指針を見出していこうとする意義あるステップであったと私は思います。日程を調整して参加した方々の、原発・放射能問題に対する思いや関わり方などは一人ひとり違うと思います。しかし、皆さんに共通していたのは原発の持つ問題性を認識し、難しくても克服し変わっていかなければならないと思う気持ちは皆さんに共通していたように感じました。

原発事故への国の対処は、いまだに手探り段階にしかなく何ひとつ終わっていません。しかし、私たちは終わったかのように、あるいは何も無かったかのように「あの時」を忘れようとします。

現実には「あの時」は決して終わった過去の出来事ではありません。原発事故は「あの時」からずーっと今も、さまざまな形で被害者を苦しめています。更に先々の将来に亘って私たちの子も孫も、命あるもの全てを巻き込み続けます。

自然災害大国と云われる日本にあって、東日本大震災は、被災地の自然による災害の激甚さに加え、日本全土におよぶ原発・科学による人災的な側面を浮き彫りにし、日本社会の矛盾や傲慢さを露呈した出来事でした。自分たちがこれまで当たり前のように享受してきた生活を同じように求め続けてよいのか、多くの人が利便や経済効率を追い続ける自分の姿を見つめ直すことや価値観を変える必要に気づかされた、それが「あの時」です。

近々、協議会の声明が世界に向け発信されると伺っています。協議会の内容が各教区に伝えられ、原発・放射能問題についての話し合いの新たなスタートになるものと思います。

電力エネルギーを多く消費する首都圏にあって、原発施設の無い教区として特に考えていかねばならないと思います。

「あの時」心に留めた思いを忘れないこと、祈ること、聖職・信徒が意見を交わしながら、この問題と誠実に向き合うことが信仰生活を送る私たち一人ひとりの責任であることを、協議会に参加して改めて感じさせられました。

聖金曜日（受苦日）説教（要旨）

「十字架上の七聖語」（二）

主教　髙橋　宏幸

✝第四の御言葉

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

これは詩篇22篇の冒頭の一節です。しかし、この言葉は絶望的で諦めだけの言葉ではありません。22篇の後半で強調されているように「全ては神様の御業である」という点が大事なテーマです。

十字架の上で極限状態にあるイエスさまが、これこそが神様の御業なのだと叫び、受け入れている、と同時に全ての人が、神様の中に居場所と命を見出し生かされ、神様と一つにされていく、とイエス様は十字架の上で宣言しているのです。

ゲッセマネで「この苦しみの杯を取り除いてください」と祈られたように、イエスさまの心の中にはできるものなら十字架を避けたいという思いがあったようです。しかし「御心のままに」とすべてを受け入れていかれます。それによってしか、すべての人が一つになり、全てであられる神様の中に自らが生かされる場所を見いだすことができないからです。

その意味でこれは、一見絶望的な叫びでありながら、まさに「勝利の宣言」なのです。

✝第五の御言葉

「渇く」

ヨハネはイエス様が長時間十字架の上にいたため「喉が渇いた」と言われたとは記してはいません。「すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渇く』と言われた」という書き方をしています。

イエス様はいったい何に渇いていたのでしょうか。そしてどのような潤いを求めていたのでしょうか。

今、地上での最後の時が訪れようとしています。それは十字架の意味が明らかになりつつある時であり、復活の命が近づきつつある時でもあります。全ての人が自らの罪に死に、神様の命の内に改めて生かされ始める、その時が今まさに起ころうとしているのです。その一つ一つがまさに神様の御心であるとして「全てのことが成し遂げられた」と言っているのです。

もし仮に「渇く」と「水」を結びつけるなら、聖書が語る水は、ある時は「清め」を表します。ある時は「死」、

それを重ね合わせて考えると、生から死というよりも、死から命へという神様の導きこそが、イエス様が真に飢え渇く程に求められていたことであり、十字架の死によって命を献げることの内に成し遂げられようとしていることなのです。

今まさに、十字架の上で死と生とが交差し始めています。そして私たちも、まさにそこに立ち合わせて頂いているのです。（続く）

［司祭のこの一冊］

「サイレント・ブレス」

看取りのカルテ

南杏子著

幻冬舎　2016年刊

司祭　小林　宏治

ある人からもらった一冊の本を紹介したいと思います。それが「サイレント・ブレス」という本です。死を迎える者とその看取りに取り組む医師たちとの物語です。

牧師となって、いろいろな方の死を見つめてきましたが、この本に登場する人々の最後の時についてはとても考えさせられました。この本は終末期医療を取り上げています。主人公は、医科大学病院での勤務から、街中の訪問クリニックに転勤になった医師です。主人公は大きな総合病院から小さなクリニックへの転勤に戸惑いながらも、与えられた現場でその働きを開始します。

基本的に医師の仕事は「患者を治療すること」で、治療によって一人でも多くの患者の命を救うことだと言われています。ところが訪問クリニックで働く主人公は、「患者を治療すること」だけではうまくいかない現実に出会います。訪問クリニックにつながる患者たちは、積極的な治療を求めているわけではありませんでした。むしろ、最後の時をどのように過ごすのか、治せない現実にどのように向き合うのかを教えてくれます。

患者一人一人の心の葛藤と共に、医師としてどのように関わっていくかという葛藤が描かれています。わたしたちは、例外なく死を迎えます。わたしたちの周りにも同じような環境にいる人もおられると思います。死という結果のみを見ると、とても悲しくなるかもしれません。けれども、死だけを見るのではなく、最後の時をどのようにして過ごすのかが問われているのです。どのように過ごしたいのか、どのように関わってもらいたいのか、その思いをくむことが重要になってきます。この本によって、人の思いに寄り添うことが如何に難しいかを改めて気づかされました。今、終末期を迎える人やその家族という現実に向き合う人がおられると思います。本人の葛藤だけでなく、それを取り巻く家族や関係者、また、医療関係者がともに葛藤の中にあることを覚えます。何を優先していくのか、どのように過ごすのか、共に悩み共に歩む姿の中に愛を感じていただければと思います。

さまざまな働き［1］

ようこそ滝乃川学園へ

滝乃川学園を覚えていただきありがとうございます。当園の近況をお知らせいたします。最初に、この6月に8年間理事長を務めた山田晃二が退任し、新たに石井慈典が理事の互選により理事長に選ばれました。現役のサラリーマンでまだ40代という若さでの就任です。創立者の石井亮一とは親戚に当たる方です。今後ともよろしくお願いいたします。山田理事長には長い間のお働きに感謝いたします。

また、昨年12月6日、平成天皇皇后お揃いで任期中最後の福祉施設の訪問先として当園を選び来てくださいました。平成4年に続き2度目の訪問となります。あいにくの雨でしたが成人部を中心にフロアーに入り、ひとりひとりの利用者、スタッフに声をかけてくださり、お話をされている姿が印象的でした。ある女性利用者の「結婚式に馬車に乗っていた人だ。」との発言があり記憶の良さに一同びっくりする場面もあり、「覚えていてくれてありがとう。」美智子皇后がお答えになっていました。控室に置いてあった「天使のピアノ」で美智子皇后が3曲聖歌を演奏されたのを聞くことができました。

皆様にご支援をいただいた成人部の新棟は、順調に運用が始まっています。障害者支援施設では珍しい、障害高齢者が安全に生活できるようにという目的の建物です。障害の世界でも高齢化が進んでおり、部屋、トイレ、風呂場等はすべて車いすの利用を想定し広くしています。また、プライバシーに配慮し個室になっています。昭和45年建築の以前の建物に比べ、明るく広く冬でも暖かいと入居者には好評です。東京でも障害高齢者に特化した建物は他にないので、見学者がたくさん訪れています。

2年前より、成人部が新棟を建て移転し、空いた場所に、ボランティアが中心となりコミュニティーガーデンを整備しています。以前から国立市の南に「蜜源ガーデン」というコミュニティーガーデンがありました。しかし土地を地主に返却しなければならず、移転先を探していました。ちょうど空き地の利用計画を模索していた当園に話が伝わりガーデンが実現の運びとなりました。月1回の作業日には30名ほどのボランティアが集まり手入れをしています。蜂に蜜を供給できる蜜源植物を中心にハーブ、ベリー類、季節の野菜が楽しめます。障害を持った方と地域の方が作業をすることを通じて自然なふれあいが生まれています。近くにお寄りの際はぜひお訪ねください。

（高瀬 祐二）

《信徒リレーエッセイ》

サツマイモに愛情をそそぐ

聖パトリック教会

小林　正樹

「穴をほる。サツマイモの苗を入れる。愛情をそそぎながら土をかける。」毎年5月の第2主日は子どもと共に守る聖餐式を立川の聖パトリック教会は大切にしています。このとき、日曜学校の子どもたちは、教会の畑にサツマイモを植え、11月の子どもの礼拝時に収穫をしています。

今年のサツマイモの植え付けには、9名の子どもが参加してくれました。日曜学校の校長とともにお祈りを献げた後、畑担当の私は冒頭の説明を子どもたちに行いました。すると一人の子どもが「愛情をそそぐ?どういうこと?」と尋ねてきました。一瞬、何と説明していいのかわからなくなりましたが、少し考えてから「神様を思う気持ちだよ」と伝えました。意味不明という反応でした。私たち信徒は神様を思う気持ちをもっているのか。子どもたちに伝えているのでしょうか。

福島を忘れない車の旅

月島聖公会　小川　昌之

東日本大震災の翌々年・２０１３年から年10回ペースで被災地を巡ると共に、新地町の仮設住宅住いの人々に寄り添おうと東北教区支援室が主催してきたお茶会に参加・慰問する旅を続けてきた。福島県の中でも、地震・津波・原発事故の三重苦を負わされた相双地域（通称・浜通り）と阿武隈山地奥地の飯舘村を中心に、ワンボックスカーに乗って。

ＪＲ池袋駅西口発の１泊２日・８百㎞の車の旅である。小名浜聖テモテ教会立寄りを皮切りに、福島で見聞きすることは、①生活圏に降り注いだ放射性物質（見えない・匂わない・味がない核種）を除去する除染作業の進捗状況と除染ゴミの保管状況②除染後の住居地・農作地（山地は住居周辺を除いて除染してない）の放射線量の現況③強制避難指示を解除して帰還を呼掛ける行政への住民の反応④浜通り各地の復興状況（浪江町の請戸地区には今なお津波被害の家屋が残っている）⑤人々の生活飲料水・農業用水の安全は確保されているか…など多岐に亘る。

現地に入って聞くと、除染作業の結果、建物周辺の線量は確かに事故直後と比べると低下したが、雨が降ったり、強い風の日には線量が上がる。帰還者数が10～15％に留まっているのは、避難先で新しい生活が始まっていること、生活の不便、とりわけ医療環境の不備が理由とされる。生まれたばかりの子が小学３年生になっている。山間地の除染は不可能として国が行っていないので、山間地に降り注いだ放射性物質（核種によって放射能の半減期が違う）の人間生活への影響が懸念される。山間地に降る雨や風により核種が移動することは無いのであろうか。山菜・川魚・海の魚・湧水（相双地域の飲料水は湧水を利用）・農業用水への影響、食物連鎖は無いのであろうか。福島産の米に影響が無い…と言い切れるのであろうか。影響は無いとする学者と行政は「風評」（根も葉もないことを真実のように言うこと）と言い、子どもの甲状腺がんの多発はその影響であるとする学者もいる。核種の完全排除が終わってない限り、放射能の恐怖は「風評」ではなく、真実と言わねばならない。

フレコンバックの山（田畑・庭土等汚染土、伐採樹木の枝、庭に置去りにされていた物資などを収納、１袋１トン）が危ない。

（東京新聞より）

人類は、米国のスリーマイル島（１９７９年）と旧ソ連ウクライナのチェルノブイリ（１９８６年）の原発事故を経験し、いろいろな知見を得ているが、原発の廃炉方法と放射性廃棄物の最終処理方法は未だに世界レベルで確立していないという。老朽原発の再稼働、ましてや新規着工などあり得ない。環境省・厚生労働省は規制基準の緩和、資料の収集サボタージュ（健康診断回避・モニタリングポストの撤去など）を始めている。原発事故は福島の事故で終わりにしなければならない。

福島の事故は人類として忘れてはならない。私の「福島を忘れない車の旅」はこうして続く。

◇　◇　◇

次回秋号
10月27日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十四）

1．牧師の集まり

信徒Ａ「この前、牧師の会合があったんだけど幼稚園の逆だったね」
信徒Ｂ「幼稚園の逆、いったいどういう意味だい？」
信徒Ａ「牧師の会合は、先生はたくさんいるけど、みんな勝手なことをいい誰も言うことを聞かない。でも幼稚園の方は、先生は一人だけど、みんな言うことを聞くからね」

2．もしノアがいたら

信徒Ａ「この混沌とした現代に、ノアが生きていたらどうするだろうね」
信徒Ｂ「そのリーダーシップを発揮して世界を導くトップになっていると思うよ」
信徒Ｃ「いや違うね、多分、動物園の園長（トップ）になってるよ」

3．神さまなぞかけ

・神さまの最初の働きとかけまして、鼻の長い動物ととります。
　そのココロは、創造（そう、象）です。
・神さまの働きとかけまして、小学校３、４年生ととります。
　そのココロは、ほとんどが救済（９才）です。
・神さまの思いとかけまして、手術患者が多くいる病院の対応ととります。
　そのココロは、下界（外科医）が大変なので助け手を送ります。